

## 『ぼくを変えた出来事』

明和町立明和中学校1年 阪村 天

これは小学校の、6年生の卒業バス旅行の時の出来事だ。

ぼくたちは小学校1年生のころから男女はあまり遊ぶことはなかった。けんかをしているというわけではないのだが、お互いが何だか遠慮というか、しゃべりにくいというか、よそよそしかった。学年が進んで、男子と女子がしゃべろうと思うと、前に誰かが冷やかされていた場面を思い出して、ぼくも何だかしゃべりにくかった。

でも、6年生になって、もうそろそろ卒業も近づき、男女も仲良くしたいなあとみんながだんだん思い始めたのか、ちょっとずつ、話をするようになってきた。

そして、卒業バス旅行の日。行き先は、スペイン村だった。バスの中で、なぜか、「クラスで誰が好きか」という話になった。卒業バス旅行ということの楽しさや今まであまりなかった、男女が話すということに、みんなうきうきとした気持ちになり、その近くにいる子たちは、笑ったり冷やかしたりしながら、楽しくバスの中で過ごした

スペイン村ではたくさん乗り物に乗ってみんな大満足だった。

バスの帰り道、行きバスの中での話の続きで、「ましな」人のランク付けをすることになった。リーダー格の子達で話し合っけてランク付けをして、男女ともそれぞれ最下位から上位まで発表するというのだ。ぼくは、最下位も発表すると聞いて、「それは、いかんやろ。」

と、言ったが、そのまま、リーダー格の子が話を進めていったし、ぼくもそれ以上は言わなかった。そして、ぼくは、上位の方にランク付けされてちょっとうれしい気分になった。

家に帰ってから、ぼくは、家族にスペイン村の楽しかった話をした。ついでにバスの中でのランク付けの話もした。すると、今まで楽しそうに聞いていたお母さんが、

「それ、ひどい話やなあ。許せへんわ。」

と、怒り出した。ぼくは、何でお母さんが怒り出したのかわからなかった。お母さんが、「何で、あんた、とめへんだんさ。」

と、言ったので、ぼくは、

「いかんやろってちゃんととめたよ。」

と、言った。すると、お母さんは、

「結局とまってないやん。本気でとめる気がなかったんさ。お母さんがその子やったら、つらくて悲しいわ。お母さんがその子のお母さんやったら、ひどくて泣いてしまうわ。ほかに誰か止める人おらへんだん。先生は一体何しとったん。守ってくれる人が誰もおらんなんて、なんてつらい卒業旅行やったんさ。」

と、言った。

そこまで聞いて、やっと、ぼくは、ひどいことをバスの中でしていたということに気づいた。ぼくは、正直言うと自分は最下位の方とは違うのではないかなと思う気持ちも少しあったので一回止めただけでまあいいかと流してしまっただし、結果、自分は上位の方でう

れしかつたから、最下位の子たちの気持ちを全く考えていなかった。

一体、最下位の方から発表された子たちはどんな気持ちで聞いていたのだろうか。思い出してみると、そのA君は、寝ていたようだった。でも、本当に寝ていたのだろうか。ぼくだったら、どんな、気持ちになるだろう。つらくて、恥ずかしくてにげ出したくなるだろう。誰か止めてほしいと思うだろう。もしかしたら、あの日、A君もそんな気持ちだったのかもしれない。つらくて、逃げだせないから寝たふりをしていたのかもしれない。そんなことを考えるとぼくは、A君たちに申しわけなく、そして、とてもひどいことをみんなですていたと自分が恥ずかしくなつた。

次の日、お母さんは、なやんでいたがどうしても、クラスで話し合い、ちゃんと人を、大事にする気持ちを持ってほしいと、先生にバスでの出来事を手紙に書いた。ぼくは、自分から先生に言うべきだったが、周りに友だちもいたから、自分ではとうとう言えなかつた。そして、手紙を読んだ先生に呼ばれて、ぼくは、その時の様子を詳しく話した。

ぼくたちは学級会で話し合つた。自分たちが楽しければそれでいいと言う気持ちでいたことや、自分がそういう立場だったらということを考えられず、人の気持ちを考えることができなかつた、ということ話し合い、反省し、謝つた。先生も謝つた。先生は、バスでの出来事を気づいてなかつたけど、それをとめられなかつたこと、そして、つらい悲しい思いをさせてしまったことを泣きながら謝つた。そして、ぼく達は、あと少しの小学校生活を一人一人が楽しいものにするために、自分の行動をよく考え、いつも相手の気持ちになつて行動しよう話し合つた。

この出来事は、ぼくにとって、相手の気持ちを考えて行動しよう、そして、いけないことはきちんと、勇気を持って最期まで止めようと強く思うきっかけになつた出来事だった。